最盛期を迎える 首里城正殿復元工事（その3）

正殿復元工事の上塗り塗装が始まる

首里城正殿復元工事（工期：R4年～R8年）は、令和8年の完成を目指して進めています。

令和7年1月末時点において、工事中の正殿を覆う「素屋根」の中では、屋根工事や内外部塗装、内外部の木工事等が進められているほか、寄付金による沖縄県首里城復興基金を活用した木彫刻類等の納入が進められています。

1月8日には正殿の赤色を彩る仕上げの上塗り塗装が始まりました。古文書によると首里城の修理に際し、久志間切（現在の名護市久志周辺）へ漆塗装の顔料の調達を指示した記述があります。平成復元時は、その顔料が不明で、市販の弁柄を使用していました。その後の研究で、久志周辺の水辺に存在する鉄バクテリアによって生成される天然の顔料である可能性が高いことが分かりました。令和の復元ではこの天然の顔料（久志間切弁柄）による赤色を再現し復元に取り組んでいます。今後、中塗りの黒い状態の外壁が赤色の上塗り塗装により着色され、5月頃には外壁全体の上塗り塗装が概ね完了する予定です。

塗装工事の手順については、下記の図を参照ください。

中塗り（黒色）完了後（R6.8）
＜入母屋部分の破風板＞

上塗り（赤色）作業の状況（R7.1）

正殿屋根施工状況（R7.2.）
＜入母屋部分の破風板上塗り完了、軒下外壁：左（中塗り）右（上塗り完了）＞

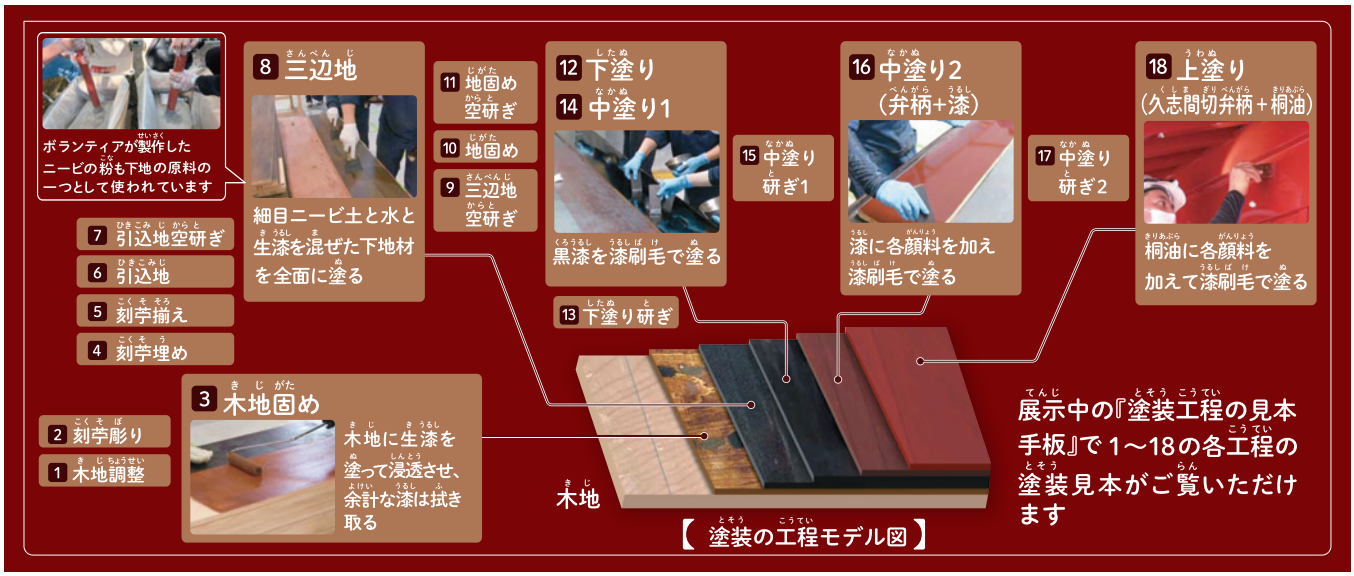

図　塗装の工程（外壁用）

沖縄県首里城復興基金による取組状況

寄付金による「沖縄県首里城復興基金」の一部を活用した県調達品については、令和6年度下半期においても、引き続き、数々の木彫刻類が納入されており、令和6年11月8日に向拝透欄間、12月20日に向拝奥の彫刻物「金龍」等、令和7年1月24日に唐破風妻飾り、向拝奥の彫刻物「獅子」・「牡丹に獅子・唐草」が沖縄県から沖縄総合事務局へ引き渡されました。繊細な仕上がりで白木の状態で納入された木彫刻類は、今後、当局正殿復元工事において彩色や設置を行います。

また、「見せる復興」についても引き続き取り組んでおり、見学エリアからは、屋根工事や前述の漆塗り作業等が見学できます。外壁中塗りの黒い状態から赤色に変わっていく様子が見られるのは今だけですので、日々変わっていく正殿を見に首里城へ足を運んでいただけると幸いです。

お問合せ先
開発建設部　建設産業・地方整備課
☎098－866－1910

沖縄県から納入された向拝奥の彫刻物「金龍」（R6.12.20）

沖縄県から納入された「向拝透欄間」（R6.11.8）

沖縄県から納入された「唐破風妻飾り」（上）、向拝奥の彫刻物「獅子」（下両側）・「牡丹に獅子・唐草」（下中央）（R7.1.24）

焼失前の首里城正殿

素屋根見学窓から工事見学する来園者